国際平和ミュージアムへの提言―地域社会と世界へ向けて―&特別展「影山光洋写真展」学生参加に関する報告

冨岡　与志子

はじめに

立命館大学の国際平和ミュージアムは、日本の戦争体験に基づき、「平和と民主主義」の実現という、世界的な使命に貢献可能な博物館として1992年に設立された。「反戦」と「平和」は常設展や特別展、学術的研究のテーマとして追求され、地域や国際社会に発信し続けている。開館から10年余り、「平和のための歴史博物館」から、「過去を踏まえ、現代を見据え、未来に発信する創造的な平和博物館」として新生するための改革案も提案され、今後より発展的な活動が実現されるであろう。

しかし、今、日本は改憲論が叫ばれ、戦後初めて自衛隊が戦闘地域に派遣されるなど、2003年３月アメリカが始めたイラク攻撃を機に、戦争への道を歩み始めたかのような事態が起きている。この危うい時代に、国際平和ミュージアムが持つ使命の特殊性と国際性を再確認すると同時に、地域社会や世界へ向けて「平和」のメッセージを伝え続ける役割を、今まで以上に果たすことが求められることも確かである。

「戦争」「平和」をテーマにした展覧会を制作してきた立場から、博物館運営や地域社会での活動を活性化するための提言をしたい。また、筆者が国際平和ミュージアムに企画提案し、開催された「影山光洋写真展」で行われた試みを併せて報告する。

尚、本稿の提言は、国際平和ミュージアム高度化推進委員会による「立命館大学国際平和ミュージアム高度化推進委員会答申（骨子）」が発表された2003年５月以前に書いたものである。

１．提言：国際平和ミュージアム、地域社会に開かれたミュージアムを目指して

(1) ミュージアムの理念と目的

立命館大学国際平和ミュージアム（以下ミュージアム）は、設立準備に３年の歳月をかけ、大学の教学理念である「平和と民主主義」を具体化する社会開放施設として、1992年５月19日に開館、翌20日に一般公開した。1990年５月に常任理事会で決定された基本構想書によれば、ミュージアムの設立は「立命館大学の平和研究・教育の蓄積に支えられ、戦争体験を語り継ぐ運動にこめられた国民的な願いに応える」ものであり、その趣旨は「過去の歴史に学びながら現在の状況を科学的にとらえ、未来にむけての平和への道筋を明らかにすること」である。そして、①国際性と現代性を持つ②過去の戦争の実相を伝える③立命館大学の平和研究・教育を発展させ、問題提起をする④社会に開放され、地域に根ざす、という４つの特徴を目標としている。また、過去の戦争について、「日本にとどまらず広くアジア諸国民の歴史と運命を根底に位置づけ、トータルに事実に基づいて正確に伝え」、「戦争に反対し阻止する運動や諸条件の成長を正確に描く」ことを明確に打ち出している。

ミュージアムの目的は、戦争と平和に関する資料を収集・保管・展示するとともに、内外の教育・研究に寄与すること（立命館大学国際平和ミュージアム規程第２条1992年３月27日規程第260号。但し、この規程は、1998年４月１日立命館大学国際平和センターが設置された際に廃止され、ミュージアム運営取扱規則が新たに制定された）とし、その目的を達成するために下記の事業を行うと謳っている。

①平和教育・研究のための資料収集・保管・展示
②平和教育・研究を促進するための事業
③博物館学芸員課程の実習
④国内・外の博物館・研究施設などとの交流
⑤その他ミュージアムの目的達成のための必要と認める事業

美術館、博物館を持っている大学は、日本では諸外国に比べ決して多くはないが、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館のように、大学の持つ歴史的背景や固有の分野を専門としたアーカイブや資料館は存在意義が大きい。公立である広島や長崎の原爆資料館とは異なり立命館大学は私学であり、大学が人類の恒久的テーマである「戦争と平和」を世界に向けて発信している

稀有な例である。

(2) 過去の企画実績と参観実績

ミュージアムは大学の理念を具現化する地域開放型施設として11年、これまでに多数の事業を実現してきたが、ここでは展示事業にのみ言及する。

常設展の来館者数は、次の通りである。

年度	個人	団体	全体
1992	13115	12562	25677
1993	12185	29358	41543
1994	8509	24343	32852
1995	11026	29646	40672
1996	5656	25859	31515
1997	7683	24274	32157
1998	8303	19454	27757
1999	12447	18583	31030
2000	10113	21453	31566
2001	14702	21759	36461
2002	14517	23952	38469

(立命館大学国際平和ミュージアム紀要第２号2001年＆３号2002年＆４号2003年)

11年間の来館者数の合計は369,699人であり、年間の平均は約33,609人であまり大きく推移していない。常設展へのリピーターの来館がこの表からでは分からないが、来館者の新規とリピーターの比率を調査することも今後有益な資料になろう。もし、新規の来館者が多いとするなら、ミュージアムの存在が定着したと言える。国際平和ミュージアム高度化推進委員会が、常設展のリニューアル問題の討議を重ねてきており、新たな展開が期待できるが、リピーターの可能性も考慮に入れながらの検討も必要であろう。

常設展は当初入館料が無料であったが、1993年11月から有料化している。博物館、美術館が社会的役割を果たすためには、ある程度の経済援助がない限り入館の無料化は難しい。また、入館料を払って見る場合に比べ、無料であると展示物に対して貪欲にならず、目的意識や理解する意欲が希薄になることがある。文化に金を払う習慣を身につける意味でも、有料化は当然の措置であろう。

特別展は、講演会、シンポジウム、パンフレット刊行など関連事業も同時に行われ、回数は年度平均３―５回で、2003年度まで合計43の特別展が開催されている。特別展はすべて直接「戦争」を扱ったものである。

企画と時機の問題は常に考慮すべき開催要件である。「何を」と「いつ」は必然的な関係にあり、社会の関心をタイムリーに喚起させることが問題に対するより深い理解へつながる。整合性の欠落した展覧会は説得力もアピール力も持ち得ない。そういった意味で、1992年、国連軍縮週間記念「国連市民―平和を求めて」、1993年、学徒出陣50年・わだつみ像建立40周年記念「戦争、大学そして学生」、1995年、戦後50年平和企画「戦争と教育」「原爆開発と投下への道―マンハッタン・プロジェクト」「沖縄戦」「世界報道写真展」「戦時下日本の報道写真―梅本忠男と『写真週報』」、1997年憲法施行50年記念「憲法・平和・未来」、1998年「無言館」開館記念戦没画学生「祈りの絵」、そして20世紀最後の年2000年に開催された「日本人・オランダ人・インドネシア人―日本占領下のオランダ領東インドの記憶展」はまさに時機に合った企画と言える。また、約6,000人が観た企画に、1996年に行われた「中村梧郎写真展：戦場の枯葉剤―ベトナム・アメリカ・韓国」と「はだしのゲン」の原画展がある。前者はベトナム戦争、後者は原爆が題材で、両方とも時代や国を超えて伝え続けなければならない普遍性の強いテーマである。写真展は全国的に人気が増大しているが、特に報道写真に対する関心の高さは、1995年度から定期開催になった「世界報道写真展」が毎回６，000人の参観者数で安定していることからも伺える。

(3) 提言

第二次世界大戦に敗戦した日本は唯一の被爆国であり、同時にアジアに対しては加害者である。「加害者としての日本」という歴史認識を持つに至るまで長い時間を要した日本は、戦後58年が過ぎた今も、いまだ戦後処理が清算できていない。この戦争の実態をアジアにまで広げて検証することは、被害者という立場を脱却し、真の戦争反対へ向かう道筋を作ることである。日本は、戦争の過ちを反省し、反ナチズム教育を戦後一貫して行ってきたドイツに見習い、歴史の客観的な検証とその継承、そして、平和な未来の創造を実現すること、そのために平和教育の充実化が求められている。特に核兵器廃止問題は日本が世界に負っている大事な使命と言えよう。立命館大学の教学理念である「平和と民主主義」は具体的には「反戦」であり、「平和

を実現するための思想」である。従って、立命館大学が平和教育の一環としてミュージアムを設立した意義は大きく、これを継続してゆくことは国際的な責務であろう。

ミュージアムが、多くの学生や地域の人たちにとって、今まで以上にミュージアムの事業に興味を抱き、かつ有効利用しやすい施設になるためには、①歴史、時代、文化の貴重な記録を収集、保管、公開することを継続させる、と同時に、常に新しい情報を提供し、今日的な問題を提示する　②次世代へ知識や経験を継承する　③創造への情熱や意欲が湧く刺激的な交流の場とする、ことが大事であろう。大学ミュージアムが一般のミュージアムと異なる点は、来館者の優先順位にまず学生がいることである。それゆえ、より啓蒙的教育的責務を担っていると言えよう。もちろん、実際には観客を学生に限定しているわけではなく、一般の人たちに対しても説得力のある展覧会を企画していくことが求められているが、一般ミュージアムとの差別化は今後討議すべき課題であろう。ミュージアムを「観る」から「想像する」「理解する」「思考する」場として認知させ、ミュージアムの外へ向かって「行動する」力を発揮し、その場を創造すること、そのためにはまず今まで以上に魅力ある展覧会作りを目指すことが重要ではないだろうか。具体的には、次の５点を挙げたい。

①重要なテーマについては繰り返し取り上げることが大事であるが、従来とは異なる新しい視点、多様な切り口で問題提起する。そのためには、時代に合った興味の掘り起こしを行い、観客の関心を喚起する方法を考察する。また、企画は幅広く大学内外から集め、企画決定のための討議を十分に行うために、企画委員会の活性化を計る。
②展示空間に関する発想を変える。「見せる」場から「楽しむ」「(知らないことを知る、体験できないことを疑似体験することによって）得をする」場に変革する。そのためには、展覧会ごとに全体図を綿密に作成し、単に作品を並列的に並べる学術論文式な見せ方を避け、大胆で効果的な会場作り、立体的で独創的な展示方法を創意工夫する。
③テーマを多角的に検証、理解するための材料として、解説パネル、キャプション、映像資料などを活用する。資料はアートリサーチセンターと協力して作成する。
④広報活動を強化推進する。地域のメディア、他大学、公共施設、機関紙、インターネット、掲示板などあらゆる場を利用して積極的に宣伝する。また、関連イベントを計画、実行する。
⑤展覧会終了時に必ず総括を行い、将来の企画に反映させる。

更に、ミュージアムが、平和教育を一層徹底し、また発信塔としての役割を果たすためには、企画の多様化、運営の安定化、次世代の継承者育成の充実化を実現すること、そのために次の基本方針を提案したい。

①経済基盤の確立

美術館・博物館運営、展覧会事業は「金がかかる」ものであり、入館料と大学からの予算だけですべてを維持することは大変困難である。特に大学ミュージアムの入館料は高くできないという現実、大学財政が逼迫している実状を考えれば、外部からの経済援助を探求する道も必要であろう。具体的には、国、地方自治体、文化財団からの助成金、企業からの協賛金、個人からの募金などである。日本は、アメリカのように連邦政府や州政府による文化・科学・教育のための基金や助成金制度が整備されておらず、また文化や地域発展のために個人が寄付、募金をする土壌ができていない社会である。特に、「金も出すけど口も出す」という風土が残存していることも民主的活動の大きな障害になっている。しかし、発想を転換させ、「ない」「無理」と諦めるのではなく、「取ってくる」「集める」ことも時に必要ではないか。政府機関や財団への働きかけを常に怠らず、長い年月を覚悟する忍耐力と持続力を持つことを忘れてはならない。また、現在日本経済は危機的状況であるが、文化事業に理解を示し、協賛してくれる企業は存在する。現在にのみ拘泥せず、未来の展望を示しながら、理解と賛同を求める努力が必要であろう。募金活動の提唱は市民とともに行うことが大切ではないだろうか。募金の目的や意義について市民とともに討議し、社会的意義のある啓蒙運動の促進、文化貢献意識の向上、ミュージアム事業への参加意識を図るキャンペーンの一環と位置づけ、ミュージアムと市民が社会運動の牽引車になることは、社会参加を望む市民のニーズに応えることにもなる。

②世界的ネットワークの強化、特に大学ミュージアムとの交流促進、協力体制確立

1990年に策定された基本構想書で提唱されているように、世界的な平和研究ネットワークを確立し、科学的研究の基に海外の研究者・機関の参加を推進するこ

とは、ミュージアムにとって不可欠である。現代社会はあらゆる分野において国際化が進み、未来を展望する上でグローバルなビジョンが求められている。現実問題として国際間の協力、交流がなければ、世界へ発信する手段も運動の発展もありえない。立命館大学がすでに持っている世界の研究機関、大学、博物館などのネットワーク、ルートを更に強化発展させ、また新しいネットワークの開拓も視野に入れながら、情報・経験交流、共同事業など積極的に取り組むことが、ミュージアムの活動を活性化することにも繋がるのではないか。例えば、美術館・博物館を持っている大学、専門的教育設備を併設している美術館、個人のコレクターなどは現実的な協力者の候補であるし、また、個人の作家、写真家、芸術家、フリーのキューレーターなども協力を要請できる対象として含めることは可能である。交流事業の一環として行われた国内及び世界平和博物館会議の継続参加も大事である。

③地域密着開放型のミュージアム

基本構想書が目指しているミュージアムの特徴は、「多くの市民の参加と協力に支えられ、社会に開かれ、地域に根ざした博物館」、つまり、地域密着、地域開放型である。しかし、実際にはこの点はどの程度達成できているのだろうか。市民の参加とは具体的に何か、どのような協力を期待しているのか、市民の要望を実現しているか、そのためにどのような活動計画を提示しているのか、市民、地域の範囲は設定しているか、ミュージアムのスタッフや関係者は地域に出ているか、地域との交流の場はあるか—理想論ではなく、実践的な行動計画、実現可能な方策がなければ基本方針は机上の空論で終わってしまう。真の意味で市民の参加と協力を獲得するためには、まずミュージアムの理念に賛同してもらうことが原則であろう。そして、展覧会や関連事業の企画立案、講演や学習会への出席及び参加、募金・寄付集めのボランティア活動などに参画してもらうことにより、目標の達成感や運動の参加意識を得ることは市民活動の大切な要素である。市民が発言し、行動する場をミュージアムが提供することは実現可能であり、それが理論と実践に基づいた地域密着開放のミュージアムへの道ではないだろうか。より創造的な計画を作成するためには、友の会の活動実績を参考にすることも大事であろう。

④学生参加

現在ミュージアムは、学芸員実務学習や研修を受け入れている。実務学習は毎年学内外から４—20数名が参加し、特別展の展示関連、資料整理、受付業務などの実習が行われている。研修は、1994年度から国際協力事業団の「博物館技術コース」研修に協力しており、また、海外からの学芸員のための専門研修や見学研修も受け入れている。海外研修生を通して、それぞれの知識・経験の学習、交流という側面も持っており、将来も継続すべき制度であろう。今後は、学芸員志望の学生だけでなく、一般の学生も展覧会、講演会、シンポジウムなどの企画、制作、運営、パンフレット作成、広報活動に参加する制度を提案したい。一般学生にも部分的にミュージアムを開放することにより、ミュージアムへの関心や共有意識も高まるのではないだろうか。2003年10月30日から11月30日まで開催された「影山光洋写真展～知っていますか？日本に戦争があった時代を～」では、企画段階から展示作業まで本学学生が参加する初の試みとして、今後の参考になるであろう。

また海外からは、美術館や博物館の館長、学芸員、研究者、評論家、作家、写真家、ジャーナリストなどを講師として招聘することも、実習内容が多様になり、国際的視野も広がるであろう。授業でのミュージアム利用もテーマによっては可能である。

⑤委員会人事の刷新

ミュージアムの運営と企画は、企画運営委員会で討議決定される。委員会のメンバーは大部分が立命館大学の関係者である。つまり、委員は教職者、学者、研究者などアカデミズムの世界の人々である。大学ミュージアムの運営を大学関係者のみに限定するやり方は、考え方としては正当でも、創造性、現代性、企画力を要求されるミュージアムにとって、ある特定の世界の価値や思想に依拠することにならないだろうか。地域社会や世界に向けて普遍的で具体的なメッセージを発信するミュージアムは、時代と社会を見つめる平衡感覚を堅持し、豊かな発想、多角的視点を持つことが求められているのは自明の理である。そのためには、美術館関係者、企業の文化事業経験者、文化人、有識者、評論家などの人材を学外から導入することも考慮すべきであろう。

日本の美術館、博物館は、過去の資料や歴史的背景の解説パネルを時系列に展示するだけで、観る側の視線、心理、生理を意識した展示方法などはこれまであまり考慮されず、いわば一方的に「見せている」不親

切なところが多かった。特に特定のテーマを掲げている小規模の美術館は、経費や人材の問題を理由に特別展の開催には消極的で、美術館の存在理由を常設展に依拠せざるをえない状況であった。現在は、時代の変化や新しい世代の要求に応えるために、展示などに創意工夫する美術館も増えたが、根本はあまり変わっていないのではないか。しかし、常設展のみの運営に甘んじず、常設展と特別展を総合的に組み立て、テーマを立体化してゆくことが、それぞれの美術館に課せられた責任であろう。確かに厳しい事情は個別に存在するが、より魅力的な展覧会、より多くの市民が来館する美術館を目指す努力が必要である。経済問題は確かに深刻であり、不可避の現実である。しかし、最も重要なことは、美術館が負っている社会的文化的役割を果たすことである。そして、展覧会事業は美術館の義務であり、同時に権利でもある。その権利をどう行使するか、それぞれの美術館、博物館が常に自らに問わねばならない課題である。

立命館大学国際平和ミュージアムがテーマとしている「反戦」は、不幸な歴史的体験から生まれた思想であり、「平和」はその思想を基本にした人類の希望である。今日、日本では戦争を知らない世代が人口の半分を優に超え、世界では正義や国益という美名の基に、大国による戦争が正当化されつつある。今あらためてミュージアムの使命の重さを認識せざるをえない。ミュージアムがその使命から解放される日は残念ながらまだ遠い。より多くの人々がミュージアムを訪れ、展覧会を通して歴史を理解し、世界中の人々と「平和と民主主義」を共有できる時代の建設に参加することを期待したい。

2．特別展「影山光洋写真展」に於ける学生参加の試み

(1) 企画提案の動機

戦争の世紀といわれた20世紀が幕を閉じる時、世界の人々は、新世紀は平和の世紀になることを祈念した。しかし、新世紀の最初の年である2001年９月、ニューヨークの世界貿易センターで起きた同時多発テロ事件は、地球の未来に影を落とした。そして、2003年３月、アメリカがイラク戦争を始めてから、アメリカの同盟国を誇示する日本は、憲法９条不要論や「徴兵制」という単語が具体的に政治家の口から発せられ、イラクの人道支援活動ではあるけれど、戦後初めて戦闘地域への自衛隊派遣が実現するなど、戦前を想起させる、きな臭い状況が続いている。事態は、一般の予測より速い速度で危ない方向に向かっているように思える。

私が本展の企画をミュージアムに提案したのは、イラク戦争が始まる前の2002年であったが、その時、戦争は対岸の火事ではないという認識をすでに持ったこと、また、若者たちに広がっている楽観的な平和観、言い換えればある種の戦争容認論、そんな日本の現状に危機感を抱いたからであった。私自身戦争を知らない戦後世代であるが、私の親や教師たちは、あらゆる機会をとらえて、戦争の悲惨さや平和の大切さについて伝える努力をしてきた。だから、私は戦争経験者の使命をそのまま引き継ぐ責任と義務を自覚せざるをえなかった。その意味で、私は戦争経験者と接点を持つ最後の世代と自負してきた。しかし、戦争や平和の問題に関心を持たない大人が増え、若者たちは、大人たちから歴史観や反戦思想を伝承されることもなく、戦争という状況に対する想像力も培われないままに社会に出て行く。「知らない」世代、「知らなくて平気な」世代の再生産はこうして繰り返されているのである。

私は、これまで、「戦争」や「平和」をテーマとした写真展を企画、制作してきたが、かねてより、著名なフォトジャーナリストである影山光洋（故人）の写真を若い人たちに紹介したいと考えていた。1945年８月15日まで朝日新聞社のカメラマンであった影山光洋は、日本が戦争に至る経過と戦争そのものを、そして、自分の家族を通して、戦争の中でたくましく生きる庶民を記録した。若者にとって、戦争の報道写真には距離を感じても、影山家の人々の生活の中に、自分の親や祖父母の姿を重ねてみることは出来るのではないか。そのことを出発点に、若い世代が「戦争」「平和」を自分たちの問題として考えることを始めるかもしれない。おりしも、イラク情勢や憲法改正論議が連日マスコミで報道されており、「戦争」「平和」は、国民レベルでの討論を喚起できる時宜に合ったテーマだった。

同時に、この写真展は、映像メディアの観点から、「記録すること、そして、伝えること」の意味を提示する機会でもある。写真は映像メディアの原点であり、日常性の高いメディアである。普段何気なく見ている写真を、歴史の証言者、伝承者として捉え直すこと、その中に写されている情報や写真家の意図を探ること、そして、その発見を第三者にどう伝えるのかを考えること、それがもうひとつの趣旨であった。影山光洋の次男で、自身も写真家である影山智洋氏に企画を説明したところ、すぐに快諾を頂いた。

(2) 学生参加

産業社会学部の仲間裕子教授から、ゼミの学生を何らかの形で参加させたいという要請があった。ミュージアムの山辺学芸員と相談の上、学生にとっては、具体的な実習の好機であるので､教授の要請を了承した。また、本稿前半で提言した「学生参加」の実験的な試みとして、実現させたいと言う思いもあった。企画の立て方、テーマの選び方、展覧会の切り口と組み立て方など、創造的な仕事の根幹から、テーマを基にした作品の構成、解説パネルやキャプションの制作、展示、広報活動などの実務的作業まで、学生たちが直接関与することによって、展覧会を構築する過程を多少感知できるのではないかという期待があった。しかし、テーマや作品について考える過程で、戦争に対する知識や理解、平和の意味を考えてもらうこと、それが学生参加の意義であった。仲間教授の授業で、企画の意図、内容を説明した結果、10名近い学生が集まった。

学生たちとの共同作業は、写真展のサブタイトルやキャッチコピーを学生たちに考えてもらうことから始めた。メインタイトルは、影山氏の希望もあり、「影山光洋写真展」とすでに決定している。

展覧会を構築する作業の中で、タイトル作りは重要な仕事である。展覧会を人間に例えるなら、伝えたいテーマやメッセージは心臓、作品は骨格、タイトルは顔である。人間の顔が性格や人間性を現すように、タイトルは企画のテーマ、展覧会のコンセプトと内容を象徴的に表現したものでなければならない。あまり具体的でも、抽象的過ぎてもいけない。タイトルが映像的なイメージを示唆し、実際の作品を見たくなる衝動を促す名称が理想的である。必ずしも独創的である必要はなく、ステレオタイプな言葉であっても、興味を喚起するタイトルが良いのである。したがって、企画そのものを正確に理解することが肝要であり、理解なしにタイトルは作れない。企画者はタイトルにその思いを込める。魅力的な顔を作ろうと努力する。もちろん、展覧会の見方は観客の自由であり、何を発見し、何を感じるか、その受け止め方は様々であって当然である。

学生との最初の打ち合わせで、彼らとの間にギャップがあることに気が付いた。話の中で学生たちの口から出てきた言葉は、「戦争は暗いイメージがある」「これまで戦争をテーマにした展覧会に行ったことがあるが、いつも同じであまり面白くないし、気分が落ち込む」「政治的なこと、思想的なことはあまり好ましくない」「戦争という単語を展覧会名に使用したくない」などだった。「戦争と言う言葉をタイトルに使うと、各人が持っている既成のイメージがあり、展覧会の中身を想像して、若い人は逆に来ない可能性がある」「戦争の残虐性ばかり強調せず、戦争の中での日常を表面に出して、戦争の暗いイメージを希薄にする」と言う主旨の発言であった。展覧会で扱う「戦争」に対するイメージの固定化、思想、政治という言葉に対する偏見など、「戦争」や「平和」を直截に扱った企画に参加した動機を理解しかねる部分もあった。「明るい戦争はない。すべての戦争は暗くて不幸なものである」「思想という言葉を否定的にとられているが、平和は思想である」「戦争を他人事で捉えず、現実の問題として認識して欲しい」と、私は学生たちに説明したが、しかし、一方で、戦争をテーマにした展覧会は面白くないという意見は的を射ている指摘でもあり、シリアスなテーマを扱う展覧会作りの困難さをあらためて認識した。また、未来への展望という視点が重要な要素であることも確かである。過去の歴史は変えようもないし、歴史にifはないが、否定的な世界観を与えるのではなく、人間の犯した過ちを教訓とする知恵を会得し、希望と自信を持って、次世代を創造する力を育成するきっかけを作るのも展覧会の役目である。戦争を知らない世代に戦争の問題を考えてもらうためには、まず展覧会に来てもらわねばならず、来てもらうためには関心を持ってもらわねばならず、関心を持ってもらうためには、彼らの感性を触発するものを作らなければならない。少なくとも、学生たちは写真に記録されている「家族」「庶民の生活」には興味を持ち、展覧会制作に参加する意思があるわけだから、企画へのアプローチは必ずしも一様である必要はない。

学生たちが提案したサブタイトルは、「絆」「風景」「ぬくもり」「ともしび」といった抽象的、情緒的、心象風景的な表現が中心で、「戦争」を直接的にイメージするものはなかった。影山氏、山辺学芸員と相談した結果、写真展の内容がある程度想像できて、押し付けがましくなく、「おや」と思わせるサブタイトルとして、「知っていますか？日本に戦争があった時代を」に決めた。

よく話を聞いてみれば、学生たちの側には、企画立案から参加できるという誤解があったようで、当然展示作品の選定にも関与できると考えていたらしい。実際には、私が提案した写真展「影山光洋写真展」のテーマは「戦争と家族」で、これは変更できない。写真もすでに97点選定済みである。また、本展の展覧会の

組み立ては影山氏、山辺学芸員、私の３人で基本を作り、実際の展示作業は影山氏と私、会場構成と図録制作・編集は山辺学芸員が担当することになっており、学生の参加はある程度骨格が出来ている段階からになるわけで、その点学生の期待を裏切ることになってしまった。

私の心底には、今回の写真展は「アート写真」ではなく、現実そのものを写す「報道写真」「ドキュメンタリー写真」の展覧会であり、テーマを抽象的な観念としてではなく、今日的問題として認識して欲しいという思いがあった。学生の中に、このテーマを現代美術という形で表現したいという企画提案があったが、この写真展とは馴染まないというのが私の率直な感想であった。また、写真を切り抜いてパネルに貼る、写真の中に吹き出しを付けて文章を書き込むという案も出されたが、これはまったく不可能である。作品は尊重されねばならず、作品に加工をすることは著作権侵害になり、ポスターや図録など印刷物にする場合、作品のトリミングや、文字をかぶせることは著作権者の許諾が必須条件である。作品尊重の原則は学習できたと思う。

影山光洋は、自分の撮影した写真を台紙に貼り、台紙に克明なメモを書き込んでいた。実際にはメモという簡単なものではなく、記録ノートである。撮影日、撮影場所、撮影内容、記録された事件または出来事の背景、国内外の情勢などを、写真家らしい視覚的な描写を織り交ぜながら、肉筆で詳細に書き綴っており、写真に記録された歴史や事件、写真の意味がより深く理解できる資料としても貴重である。日本が戦争に傾斜して行った道程、普通の人々が戦争に巻き込まれてゆく過程、影山光洋の心情が、映像と言葉で疑似体験できる。

(3) 用語解説と展示物

この写真展のもうひとつの柱である影山家の家族写真は、家族に対する愛情を内包しつつ、記録者としての客観的な視線で、戦時という環境の中で、助け合いながら生きている家族の姿を自然体でとらえている。影山光洋のカメラアイは、「緊迫感」と「日常性」という相対立する状況を対比的に写しとるのではなく、不思議な調和で映像化しており、影山家の日常を通して、戦争と言う特殊な状況の中でも普通の家庭生活が営まれている事実を発見し、学生たちは新鮮な驚きを隠せなかった様である。

この台紙にある記述の中で、学生たちが知らない事件や言葉が多数あった。戦時中の特殊な用語、すでに死語化している日常生活の言葉などは、戦後もすでに60年近い年月が経過し、日本人の衣食住のライフスタイルも大きく変容しているのだから、解らなくて当然のことである。この学生たちが理解できないと言うことは、とりもなおさず、他の若者たちも理解できないと言うことである。特に若い人たちに見てもらいたい写真展である限り、彼らを欲求不満にしてはならない。まず、知らない用語、事件を洗い出し、自分たちで調べることを提案した。歴史書など様々な文献を読み、自分たちで用語解説を作る工程は、歴史の学習や知識の会得だけでなく、日本近代史の文脈の中で、国家と個人の問題を考察する好機でもあったと思う。その用語解説は別紙にして会場で配布し、また展覧会図録にも収録されている。

学生たちからは、戦争関連の資料や写真に出てくる当時の生活用品を展示したいという提案があり、ミュージアムの収蔵品の中から、日の丸の寄せ書き、日の丸手旗、軍服、決戦服、もんぺ、防空頭巾、竹槍、徴用告知書、隣組回覧板、家庭用品購入通帳、灯火管制用被い布、そして、影山光洋の写真が掲載された当時の新聞や雑誌も、学生たちの手で展示した。額装された写真は、完結された作品としての重みを留意させるが、新聞や雑誌で発表された写真は、記事の内容を確認できる作用もあり、見る側は、主にそこに記録された人間や事件の内容に関心を持つ。また新聞の場合は、他の記事や写真なども並列的に目に入るので、写真が撮影された時代、社会状況の情報も解り、歴史の文脈で写真の価値や意味を巨視的に考察できる。

つまり、展示物は、写真に写っているものを、立体的に想像できる補完的な役割があるので、効果的な展示方法を工夫することが重要になる。この作業を行う中で、会場の全体の構成、バランスや作品との関係性をどう計算するか、自然に学習できたと思う。これは机上の観念的思考ではなかなか実感できず、現場で体得する作業である。

実際に写真を掛ける展示作業に携わった学生たちは、私の期待以上に熱心に働いた。会場の構成は、全体のバランスを常に計算しながら決定してゆくのであるが、その過程に参加した者は、写真の位置や高さ、周囲の写真との関係性、照明の効果、展示物の適切な配置などは、写真をより解りやすくするために適切に考慮されなければならず、見る側の生理に反発しない、自然な動線が如何に重要であるかを理解してもらえたと思う。

(4) 関連イベント

講演会は、「記録すること、伝えること」というテーマにふさわしい作家で、東京大空襲・戦災資料センター館長である早乙女勝元氏と、影山家の次男であり、また、自身も写真家である影山智洋氏にお願いした。早乙女氏は、1945年３月10日の東京大空襲の被災者であり、戦争における民間人の立場から、戦後の原点の確認として、その体験をライフワークとして執筆されてきた。そして、早乙女氏は次世代へ語り継ぐために、平和記念館の建設運動の先頭に立ってこられたリーダーでもある。

「語りつぐ戦中・戦後」と題する講演では、記録や資料がなくては、歴史の検証はありえず、「過去を知ること、学ぶことは現在を知ることであり、後ずさりする作業ではない」、また、日本と世界の情勢に対する危機感や教育の役割についても言及し、「学ぶ知性と理性があれば、人間が人間らしく生きる平和な未来を築くことが出来る」と強く説かれた。

影山氏は写真家の仕事もされながら、影山光洋の写真の管理者、伝承者の重責を担ってきた。「父・影山光洋について」と題する講演では、写真をスライドで見せながら、写真の果たす社会的文化的役割、写真の見方に力点を置きながら、写真家として、父親としての影山光洋を語って頂いた。

影山光洋が生きた時代は、世相はめまぐるしかったが、生活や仕事に集中できる時代であった。しかし、今日の社会は多様すぎて、現実も未来も「よく見えない」状況である。そのような時代にあって、記録したものを整理し、それを保存し、発表する、この作業が大変重要であると強調された。

早乙女氏の言葉どおり、「影山光洋の写真は歴史の追体験」であり、「戦争を想像し、他者の痛みを想像する力」は、この追体験を繰り返し行うことによって培われるものである。両氏の講演を通して、この写真展は追体験のひとつであることを実感した。

影山光洋が記録した時代を文化的社会的側面から観る関連イベントは、学生たちが独自に企画し、山辺学芸員の協力と支援の元に実現した。当時流行した音楽のコンサートの開催、その音楽を聴くMDを会場内に設置したコーナー、会場前の空間を利用した３Ｂ(Big Black Box) など、学生たちの視点で時代と戦争を捉える試みであった。その受け止め方は、総体的に評判は良く、学生がこのような形で活動に参加する意義に賛同する声が多かった。来館者のアンケート内容はミュージアム編の感想文集にまとめられている。

展覧会を幹と例えるなら、これらの関連イベントは枝の部分であり、副次的な役割である。イベントの企画から実現までの試行錯誤もあったと思う。しかし、自分たちの主張や表現を具現化するためのロジックと方法論を、学生なりに確立できたのではないかと思う。

(5) 学生参加の意義

今回の写真展は、2003年10月30日から11月30日まで一ヶ月開催され、合計4,955人の方に観て頂くことが出来た。年齢も小学生から70代の戦争体験者まで大変幅広い。年齢、生まれ育った環境、或いは職業により、写真展の内容の受け止め方が異なるのは当然であるが、おしなべて、この写真展を開催した意義を高く評価している。戦前戦中世代は、自分の戦争体験を回顧し、現在の日本の平和に感謝しながらも、自衛隊のイラク派遣問題を懸念している点が一様に共通しており、そして、戦争体験を若い世代に継承していく必要性をあらためて痛感している。若い世代は、戦争について知らないことを知って良かったとする一方、現実直視を回避する姿勢が潜在し、家族の絆や愛情には情緒的に敏感に反応する傾向が目立った。

写真展企画に参加した学生は、最初の打ち合わせ時から大きく変化したように思う。戦争体験者を始め、様々な人々と出会い、対話をする中で、戦争に対するイメージがそれぞれ異なることを学び、また、戦争の証言を直接聞くことが出来る時代に生きていることの責任を自覚したようである。用語解説の調査、展示物の検討、関連イベントの企画、展示などの作業を通して、影山光洋の写真を真剣に見つめ、彼が記録したこと、伝えたかったことを理解したと確信している。そして、近い将来、彼ら自身が、記録すること、伝えることの役割を継承し、戦争の無い、平和な社会を建設する展望を堅持することを期待する。

おわりに

かつて日本でも地域社会のニーズに対応するという言葉が流行したが、実際には自治体も地域社会もその概念すら明確に定義できず、独創的な文化的教育的世界観を大胆に社会に提言することができなかった。美術館・博物館も例外ではない。展覧会は企画立案、制作から予算、入館者のための普及活動まで、すべての作業が有機的に結合しなければ成功しない。そこに関わる者は、美術館・博物館の使命、役割とは何か、誰のための展覧会なのかを常に自らに問いながら展覧会

を創造していくべきであるにもかかわらず､実際には、展覧会は学芸員個人の研究発表の場と化し、美術館・博物館には権威主義や官僚的体質が横行していた。日本の美術館・博物館が、啓蒙的文化を創造、提供することも、大衆や時代の要求に敏感に反応することもできない硬直した組織であると批判されたのは、遠い昔ではない。更に、2002年、国公立の美術館・博物館は特殊法人化により、独立採算制が導入され、財政的基盤を国や自治体に依拠できなくなった。美術館運営は大変困難な時代に入ったのである。その結果、経済的実績が強要され、入館料収入を期待できる､つまり｢人が入る」展覧会への傾斜化が加速し、日本人に人気のある巨匠や大衆迎合の強い企画が優先される傾向が顕著になり始めている。今日、公立の美術館は、本来負うべき教育的啓蒙的役割を放棄せざるをえない現実に直面していると言える。明確な文化政策も確立しておらず、従って、必要な予算措置を講じることも出来ない、文化軽視の国の実態である。

私立の美術館や民間の百貨店が開催する展覧会も同様である。百貨店は元来顧客サービスの一環として文化事業を行っており、バブル時代には多くの百貨店が独自の美術館を経営していた。百貨店の意図は当然顧客の消費行動である。展覧会の帰りに買い物をする展覧会は人寄せでもあった。だから、百貨店は独自に魅力的な展覧会を次々開催したのである。しかし、不景気に伴い、宣伝予算は大幅に縮小され、展覧会の規模も内容も低下している。

展覧会事業に経済的支援を行ってきた企業の事情はどうか。

メセナという言葉がもてはやされた高度成長期に、日本の企業の多くは文化事業に助成金を出した。大義名分は文化支援であったが、実態は「わが社は社会貢献しています」というブランドを社会に定着させ、企業（商品）に対するイメージアップと信頼を生み、ひいては大衆を消費行動へ向かわせるための宣伝活動であった。だから、バブル経済が破綻し、高額な展覧会や大規模な海外美術館展の開催が困難になり、同時にメセナという言葉が死語になったことはけして不思議ではない。しかし、商業的動機であったにせよ、その企業の支援があったおかげで、大衆は国内外の文化遺産を享受できたのである。メセナは予想以上に長く続いたバブル経済の落とし子であったとも言える。もちろん、わずかではあるが、文化事業に対する理解を示す企業が存在することは事実である。この事実に希望を見出すことはできるが、やはり、全体として企業の熱は経済同様急速に冷え込んでいる。文化事業に対する経済的支援は日本経済の脆弱さもさることながら、企業の文化的土壌もまた脆弱なのである。

民間の美術館が多いアメリカの場合はどうであろうか。世界的な不況が長引く中、アメリカの美術館・博物館も冬の時代を経験している。特に90年代、アメリカの美術館・博物館は予算縮小、人的削減を余儀なくされた状況であった。しかし、アメリカでは、日本のように景気が悪くなったらすべての文化貢献は中止するという事態にはならず、企業による助成金の規模は縮小されても、支援を全面的に中止するという短絡的な現象はあまり起こらなかった。また、文化活動を支える市民による寄付やボランティア活動も低下することなく、社会全体で美術館の存続を守る環境が維持されていた。新しい時代や問題に敏感に呼応し、若い世代の育成に力を注ぐアメリカの活動は、経済的問題を超えた次元で思考している自信と、社会の要請と支援に裏打ちされているという確信に支えられているように思う。

そして、立命館大学国際平和ミュージアムが負っている責任の重要性を改めて確認したい。21世紀の幕開けと同時に世界は新たな混迷の時代へ入った。世界は過去の教訓を忘れたかのように戦争への道を走り始めている。戦争の愚かさと平和の大切さ、そして人間の生きる権利、生命の尊さを、大学のキャンパスに留まらず、地域へ、日本へ、そして世界へ向けて、発信していく役割が一層求められている。今日のような危うい時代に、美術館・博物館は確固とした理念と哲学を持ち、社会に対する役割とは何かを真剣に考える必要があるのである。

参考文献

大島清次『美術館とは何か』（青英舎、2000年）

倉田公裕、矢島國雄『博物館学』（東京堂出版、1997年）

長谷川栄『新しい美術館学—エコ・ミューゼの実際—』（三交社、1994年）

北海道立近代美術館『開館15周年記念　ミュージアムフォーラム　世界の中の美術館・地域の中の美術館』（北海道立近代美術館、1992年）

Drucker, Peter, ‘The university art museum: defining purpose and mission’ Museum Management, RoutLedge, 1994

付表　立命館大学国際平和ミュージアム　特別展一覧

回	特別展名	会期	参観者
1	ピカソと平和ポスター展	1992.5.21-6.20	3015
2	国連と市民―平和を求めて	1992.10.24-30	700
3	人間の価値―1918年から1945年のドイツと日本の医学	1993.1.9-2.8	2601
4	日本軍の収容所にいたオランダ人	1993.7.1-15	739
5	日清・日露戦争から学ぶこと	1993.7.26-8.12	8751
6	戦争、大学そして学生	1993.11.26-12.16	2789
7	戦争と子どもたち	1994.7.22-8.10	6916
8	731部隊展・京都	1994.9.28-10.11	3031
9	戦争と文学ー与謝野晶子とその時代	1994.11.26-12.11	2021
10	戦争と教育	1995.5.25-6.20	4568
11	原爆開発と投下への道ーマンハッタン・プロジェクト	1995.6.24-7.8	2594
12	沖縄戦	1995.7.20-29	1519
13	世界報道写真展　1995年次展／回顧展	1995.9.21-10.1	5094
14	戦時下日本の報道写真ー梅本忠男と『写真週報』	1995.11.10-23	2008
15	中村梧郎写真展ー戦場の枯葉剤	1996.5.9-29	5991
16	世界報道写真展　1996年次展	1996.10.5-15	4063
17	放射能発見100年・核実験	1996.11.15-12.8	2834
18	憲法・平和・未来	1997.4.25-6.12	6306
19	世界報道写真展　1997年次展	1997.10.2-19	6136
20	毒ガス展in京都	1997.11.20-12.10	2525
21	「はだしのゲン」原画展	1998.5.14-6.10	6216
22	戦没画学生「祈りの絵」展	1998.7.1-17	1916
23	世界報道写真展　1998年次展	1998.10.1-18	5814
24	日本の平和博物館展	1998.10.29-11.18	3822
25	「プランゲ文庫」展	1999.5.20-6.10	5003
26	世界報道写真展　1999年次展	1999.9.30-10.17	6002
27	科学者レオナルド・ダ・ヴィンチ展 　びわこくさつキャンパス会場	1999.10.1-24	4210
	国際平和ミュージアム会場	1999.11.5-23	3560
28	写真が語る20世紀ー目撃者	2000.5.25-6.15	6010
29	日本占領下のオランダ領東インドの記憶展	2000.8.1-10	15000
30	世界報道写真展　2000 　国際平和ミュージアム会場	2000.9.27-10.15	7012
	立命館アジア太平洋大学会場	2000.10.18-29	2027
31	戦争と芸能	2000.10.26-11.16	3137

32	手塚治虫展 国際平和ミュージアム会場	2001.5.25-6.15	8274
	びわこくさつキャンパス会場	2001.6.19-29	3510
33	ラストエンペラー遺品展	2001.8.7-9	2700
34	世界報道写真展　2001	2001.9.27-10.21	7397
35	ベトナム子ども絵画展	2001.10.26-11.15	3816
36	遺書遺品展ー戦没青年とともに生きる	2001.12.4-8	2420
37	舞鶴市明倫国民学校梅田学級児童画展 舞鶴会場	2002.4.18-22	812
	国際平和ミュージアム会場	2002.11.1-12.1	4953
38	レクイエムーインドシナ写真展	2002.5.16-6.13	9022
39	世界報道写真展　2002	2002.9.27-10.20	8124
40	百年の愚行	2002.11.21-12.20	1493
41	井戸も掘る医者ーペシャワール会の医療活動・緑の大地計画 国際平和ミュージアム会場	2003.5.15-6.15	6487
	びわこくさつキャンパス会場	2003.9.26-10.24	462
42	世界報道写真展　2003 国際平和ミュージアム会場	2003.10.1-26	8228
	立命館アジア太平洋大学会場	2003.10.29-11.14	2423
43	影山光洋写真展	2003.10.30-11.30	4955

（筆者　立命館大学大学院社会学研究科院生）